

高校生の心理学知識

Misconceptions about Modern Psychology among High School Students

木 島 恒 一^{*1} 山 下 雅 子^{*2} 野 瀬 出^{*3}

要旨

心理学についての教育を受けていなくても、人は自らの個人的経験を通じて“人の心”についての信念を作り上げている。このような人間の心の働きについての知識体系は“常識心理学”と呼ばれる。しかしそれらは一般性の乏しい、またエビデンスを欠く主観的信念であることが多く、必ずしも科学的心理学の知見と一致するわけではない。本研究では、“常識心理学クイズ”と題する心理学知識に関する正誤問題を用いて、高等学校生徒にどの程度正しい知識（あるいは誤った知識）が浸透しているかを、北陸学院大学新生との比較をとおして検討した。その結果、高校生は大学新生よりも平均正答率が低いことが示された。しかし、両者とも、平均正答率は50%に満たず、誤った心理学的信念・知識を有する者が多いことが示唆された。心理学の領域別にみると、臨床心理、社会心理での正答率が低いことが示された。また、心理学の定義に関する項目でも正答率が低く、高校生・大学新生が抱えている心理学についてのイメージそのものが、現代心理学から離れたものであることが示唆された。

キーワード：常識心理学 (common-sense psychology) / 心理学知識 (knowledge of psychology) / 誤信念 (misconceptions) / 高校生 (high school students) / 大学新生 (first-year university students)

目 的

心理学についての教育を受けていなくても、人は、自らの個人的な経験（家族や友人による影響、マスメディアからの情報、インターネットによる検索など）を通じて人の心についての信念を作り上げている。このような人間の心の働きについての知識体系は“常識心理学 (common-sense psychology)” (Kelley, 1992)、“通俗心理学 (popular psychology)” (Lilienfeld, Lynn, Ruscio, & Beyerstein, 2010)、あるいは“世間一般の心理学 (lay psychology)” (福田, 1987)

と呼ばれる。心理学についてのマスメディアの取り上げ方が、面白さに焦点を絞った興味本位のものであることから推察されるように、“常識心理学”は一般性に乏しい、またエビデンスを欠いた主観的信念であることが多く、科学的心理学からみて妥当とはいえないものが少なくない。

大学生についてみると、彼らが心理学の講義前にすでに様々な誤信念 (misconceptions) を有していることは、古くはNixon (1925) とGarrett & Fisher (1926) 以来、多くの研究が指摘しているところである (例えば、福田, 1987; Kowalski & Taylor, 2009; McKeachie, 1960; 丹治・木島・山下・飯澤, 2003; Taylor & Kowalski, 2004; Vaughan, 1977)。これらの研究では、心理学についての短文を実験参加者に呈示して真か偽 (○か×) で解答を求めるといった方法がとられ、そのためのテストはこれまでも幾つも作成されている (例えば、福田, 1987; Holley & Buxton, 1950; McCutcheon, 1991; 丹治他, 2003; Vaughan,

*1 KIJIMA Tsunekazu
北陸学院大学 人間総合学部 社会学科
心理学概論Ⅰ・心理学概論Ⅱ

*2 YAMASHITA Masako
東京有明医療大学 看護学部 看護学科

*3 NOSE Izuru
日本獣医生命科学大学 比較発達心理学教室

1977)。

われわれはこれまでに、丹治他(2003)が作成した“常識心理学テスト”と称する現代心理学に関する正誤問題を、担当する“心理学”ないし“心理学概論”の初回授業で施行してきた。このクイズ実施の主目的は、受講生の“心理学”講義への興味と授業参加への動機づけを高めることであるが、同時に心理学教育前の大学生たちが持つ現代心理学に関する知識についても大まかにとらえることができる。その結果、大学新入生の正答率は5年間の経年変化を見る限りでは一定であること(山下・木島・野瀬, 2010)、大学新入生の多くは少なからぬ誤信念を持っているだけでなく、それを正しいと確信していること(木島・野瀬・山下, 2008)、社会人経験のある大学生では大学新入生に比較して誤答が少ないが、社会人経験によっても修正されない種類の誤った信念・知識があること(丹治他, 2003; Kijima, Nose, & Yamashita, 2012)、認定心理士資格の取れる学部学生は他の学部学生より正答率が高いこと(野瀬・木島・山下, 2009; 丹治・木島・山下・野瀬・岡部・市原, 2006; 丹治・山下・木島・飯澤, 2005)などを明らかにしてきた。これらは大学新入生を対象とした研究であったが、大学入学前の高等学校生徒(以下、高校生と略す)もまた、心理学に関する誤った信念・知識を持っていることが考えられる。実際、Garrett & Fisher(1926)は87年前に、アメリカの高校生が多くの心理学的誤信念を有していることを明らかにしている。

本研究では、高校2年生が有する心理学知識について、北陸学院大学新入生との比較をとおして、探索的に概観することとした。

方 法

1. “常識心理学クイズ”の構成

丹治他(2003)の“常識心理学クイズ”は、心理学に関連する40項目の短文(例えば“心理学とは、フロイトの創始した精神分析学とほぼ同じものである”)の正誤を○×形式で問う形式となっている(正解はすべて×)。さらに各問につ

いて、自分の解答を正しいと思うかどうかを“はい/いいえ”の形式で回答させた。40項目は、McKeachie(1960)、Vaughan(1977)、稲葉(1991)などが作成した短文と、丹治が任意に作成した短文から構成されている。このクイズ実施の主たる目的は、前述のように、受講生に心理学の授業に対する興味を抱かせ、授業への参加の動機づけを高めることにある。そのため、ここで使用している項目の中には、その表現に厳密さを欠くものや、厳密にみれば論争中のテーマも含まれている。そこで本研究では、表現の厳密さに問題の残る10項目を除いた30項目を分析の対象とした。解答については正しく棄却できた項目に1点を、そうでないものには0点を与え、高校生、大学新入生別に平均正答率を算出した。なお、採用した30の項目はすべての心理学の領域をカバーしておらず、また、項目の数は各領域で必ずしも同数とはなっていないことも、あらかじめ記しておきたい。

2. 調査対象者および実施時期

(1) 高校生

富山県立A高等学校の2年生で、2011年12月、大学の“心理学”の模擬授業に出席した46名(男性16名、女性21名、性別不明9名)であった。

(2) 大学新入生

北陸学院大学人間総合学部学生で、2011年度前期開設科目“心理学概論I”の最初の講義に出席した受講生104名のうちの1年生88名(男性22名、女性66名、平均年齢18.03歳)であった。

3. 手続き

(1) 高校生

“心理学”の模擬授業の冒頭で“常識心理学クイズ”を印刷した用紙を全員に配布し、その後、担当教員が1項目ずつ読み上げ、受講者は一斉に○か×で解答して、その解答が正解であるかどうかを“はい/いいえ”で回答するというスタイルをとった。全40項目の解答および回答が終了した後、その場で正解を発表し、40項目の解説プリントを配布した。その後、クイズ用紙を回収した。

(2) 北陸学院大学人間総合学部新入生

“心理学概論Ⅰ”の第1回目講義を始める前に、“常識心理学クイズ”を印刷した用紙を全員に配布し、同上の手続きで実施した。

4. 結果の処理法

まず、40項目のうち、先に述べたような表現の厳密さに問題の残る10項目を除いた30項目についての平均正答率を算出し、高校2年生がどの程度心理学知識を有しているかについて、本学新入生との比較をとおして検討した。ついで、高校生の中に浸透している誤った知識がどのような内容のものであるかを概観するために、項目別に正答率について検討した。また確信率（自分の解答が正解であると思うかどうかで“はい”と回答した者の割合）は、回答漏れのある者を除く124名（高校生40名、大学生84名）について検討した。

結果

1. 高校生と北陸学院大学新入生の平均正答率と平均確信率

A高等学校2年生および北陸学院大学新入生の基礎統計量は、表1に示すとおりである。平均正答率についてみると、高校生は41.7%、大学新入生は49.4%で、ともに50%を下回っており、高校生・大学新入生の多くが心理学について誤った信念を抱いていることがうかがわれた。両群の平均正答率について統計的に検討したところ、高校生は大学新入生より有意に正答率が低いことが示された ($t(132)=3.34, p<0.01$)。また、自分の解答の正しさに関する確信率には、高校生と大学新入生の間に有意な差は見られなかった ($t(122)=0.73, ns$)。

表1 A高等学校2年生と北陸学院大学新入生の正答率(%)と確信率(%)の基礎統計値

	高校生		北陸学院大学新入生	
	正答率	確信率	正答率	確信率
平均値	41.7	32.1	49.4	36.2
標準偏差	23.1	11.8	20.9	11.4
最大値	87.0	55.6	85.2	64.0
最小値	6.5	13.6	10.2	14.0
範囲	80.4	41.9	75.0	50.0

(注) 正答率は、高校生46名、大学生88名のデータによる。また、確信率は、回答漏れを除く高校生40名、大学生84名のデータによる。

2. 項目別に見た正答率と確信率

表2に、高校生の正答率の低かった順に項目を示した。また、同項目に対する北陸学院大学新入生の正答率を並列で示した。また、括弧内に確信率を記した。表中、短文末の隅付き括弧内の表示は項目の短文内容が含まれる心理学領域を示している。この領域の同定は丹治他(2003)によった。なお、表中の点線は、高校生の正答率の低位10項目および上位10項目の境界を示す。

項目別の平均正答率が50%以下の項目をみると、高校生では全30項目中20項目と大半を占めていた。それに対して大学生では平均正答率50%以下の項目は14項目であった。これを心理学領域別にみたものを表3に示す。高校生と大学新入生の傾向はほぼ同じで、心理学全般、臨床心理、社会心理で正答率が低いことが示唆された。そこでさらに、項目別の平均正答率を高校生と大学生の間で比較するために、 χ^2 検定を行った。その結果、表2に示すように、全30項目中5項目において有意差が認められ、いずれの項目も高校生は大学新入生より、正答率が低いことが示された。確信率に関しては項目9のみ有意で、大学新入生の方が自分の解答に自信を有していた ($\chi^2(1)=3.87, p<0.05$)。

次に表2に示した高校生と大学新入生の、短文30項目それぞれに対する正答率の異同を、Spearmanの順位相関係数を用いて検討した。その結果、両群の正答率の順位間には $r_s=0.906$ という有意な正の相関が認められた ($p<0.001$)。このことから、正答率は高校生の方が低い、誤答されやすい項目、正しく認識されている項目は、両群とも共通していることが示唆された。また、確信率についてもSpearmanの順位相関係数を求めたところ、 $r_s=0.769$ という有意な正の相関が見られた。自分の解答に自信を持ちやすい項目、持ちにくい項目というものも、高校生と大学新入生とで類似していることが示唆された。

表2 A 高等学校高校生と北陸学院大学新入生の各項目に対する正答率・確信率の比較

項目番号	質問短文	A 高等学校	北陸学院大学
		正答率 (確信率)	正答率 (確信率)
(1)	生理学者は肉体を研究する。心理学者は心を研究する。 【心理学全般】	6.5% (32.6%)	28.4% (37.2%) **
(31)	臨床心理学者として開業するためには、日本では厚生労働省の実施する国家試験に合格しなければならない。 【臨床心理】	8.7% (32.6%)	12.5% (36.8%)
(33)	子供は大人よりずっと容易に暗記することができる。 【記憶】	10.9% (50.0%)	10.2% (64.0%)
(26)	訓練された精神科医や心理学者は、正常な人間が精神病患者を装っても数回の面接を行えばそれを簡単に見破ってしまう。【臨床心理】	13.0% (45.5%)	26.1% (37.2%)
(6)	目の見えない人は、目の見える人とは異なった鋭敏な触覚を持っている。【感覚・知覚】	15.2% (55.6%)	20.5% (57.0%)
(4)	赤ん坊にとって幸福なことに、人間の女性は元来強い母性本能を持っている。【発達心理】	17.4% (33.3%)	19.3% (46.5%)
(23)	単純でつまらないアルバイトをした後、高いバイト料を貰った人のほうが、安いバイト料を貰った人よりもその作業を高く評価する。【社会心理】	19.6% (34.1%)	37.5% (39.5%) *
(24)	精神科医は精神分析を用いる医師として規定されている。 【臨床心理】	19.6% (20.5%)	27.3% (31.4%)
(15)	より強く動機づけられるほど、複雑な問題を巧みに解決できるだろう。【動機づけ】	26.1% (20.5%)	51.1% (23.3%) **
(39)	子供の知能指数と学業成績とはほとんど相関しない。 【性格・知能】	26.1% (25.0%)	46.6% (26.7%) *
(30)	教師の生徒に対する期待と、その生徒の学力とは無関係である。【教育心理】	30.4% (31.8%)	44.3% (48.8%)
(3)	『心の研究』という言葉は、心理学を定義した最も短い定義である。【心理学全般】	34.8% (24.4%)	35.2% (27.9%)
(40)	幻覚や夢、あるいは病的な状態にある場合を除いて、正常な心理状態下では物理的に存在しないものは眼には見えない。【感覚・知覚】	37.0% (36.4%)	47.7% (27.9%)
(2)	心理学は一つに体系化された科学である。【心理学全般】	39.1% (20.5%)	58.0% (23.3%) *
(34)	個人である決定を下すよりは、集団で討議して決定を下		

高校生の心理学知識

	すほうが、過激な結論になりにくい。【社会心理】 ………	39.1% (18.2%)	38.6% (31.4%)
(5)	多分、人間の闘争本能が戦争の根本的な原因なのであろう。【社会心理】 ……………	41.3% (26.7%)	56.8% (36.0%)
(10)	心理学は、フロイトの創始した精神分析学とほぼ同じものである。【心理学全般】 ……………	41.3% (18.2%)	50.0% (14.9%)
(18)	平均的な赤ん坊に適切な訓練を行えば、普通より2か月はやく歩けるようになる。【発達心理】 ……………	43.5% (25.0%)	59.1% (24.4%)
(9)	子供に何かを学ばせる場合、できた時に報酬を与えることと、できなかった時に罰を与えることは、子供の学習に同じくらいの効果がある。【学習心理】 ……………	47.8% (25.0%)	62.5% (42.5%)
(16)	血液型 (A・B・AB・O) と性格の間にはある種の関連があり、このことは心理学的に実証されたと言……… てよい。【性格・知能】 ……………	50.0% (31.8%)	56.8% (36.0%)
(7)	人間の視知覚機能は、光学機械などとは比べようもなく精緻であることが実験的に明らかにされており、可視範囲であれば極めて正確に外界をとらえることができる。 【感覚・知覚】 ……………	54.3% (22.2%)	58.0% (27.6%)
(28)	念動 (サイコキネシス) や未来予知に関してはまだ不明の部分があるが、テレパシーに関しては程度の差はあれ、人間に生物学的に備わっている能力であり、訓練次第でその能力を伸ばすことができることが科学的に明らかにされている。【超心理】 ……………	54.3% (13.6%)	69.3% (14.0%)
(19)	統合失調症 (精神分裂病) とは性格の分裂した人のことをいう。【臨床心理】 ……………	63.0% (27.3%)	59.1% (32.6%)
(22)	我々はある事柄についてまず『意見』を持ち、次に『態度』を形成し、それに従って『行動』するのが普通であり、その逆はあり得ない。【社会心理】 ……………	63.0% (25.0%)	73.9% (38.8%)
(29)	睡眠中に生じる『金縛り現象』は、心理学では超常現象の一つとして研究されている。【超心理】 ……………	63.0% (47.7%)	52.3% (38.8%)
(20)	何か助けが必要なとき、周囲に一人しか他人がいない場合よりも、沢山の他人がいたほうが援助される可能性は高くなる。【社会心理】 ……………	67.4% (52.3%)	51.1% (41.9%)
(32)	心理学を学ぶと他人の心が容易にわかるようになる。 【心理学全般】 ……………	73.9% (0.302)	85.2% (45.3%)
(8)	現実の場面ではなく、テレビなどで凶暴なシーンを見るだけでは、子供にあまりわるい影響を与えない。		

	【学習心理】	76.1% (50.0%)	78.4% (53.5%)
(14)	知能検査は人間の知能を正確にはかることができる。【性 格・知能】	82.6% (34.1%)	84.1% (39.1%)
(17)	子供は善悪の感覚を持って生まれてくる。【発達心理】	87.0% (52.3%)	83.0% (43.0%)
(注)	* p<0.05 ** p<0.01		

表3 心理学領域別にみた正答率50%以下の項目数

心理学領域	高校生	北陸学院大学
心理学全般 (全5項目)	4	3
社会心理 (全5項目)	3	2
臨床心理 (全4項目)	3	3
感覚・知覚 (全3項目)	2	2
性格・知能 (全3項目)	2	1
発達心理 (全3項目)	2	1
学習心理 (全2項目)	1	0
記憶 (全1項目)	1	1
動機づけ (全1項目)	1	0
教育心理 (全1項目)	1	1
超心理 (全2項目)	0	0

考察と結論

1. 高校生の持つ心理学知識

欧米諸国の中には、日本の高等学校（以下、高校と略す）に当たる教育課程で“心理学”という科目が設けられている国もある。しかし、日本では高校までは“心理学”の授業がなく、“倫理”や“生物”“保健体育”などの教科で分散して心理学の内容が部分的に取り上げられているにとどまる。しかも、2009年度に高校で使用されたすべての“倫理”教科書を調べた高橋・仁平（2010）によれば、そこでの心理学に関連する記述には明らかな間違いや誤解を招く表現が多いという（その理由として、高橋・仁平（2010）は、“倫理”教科書の執筆者に心理学者が入っていないことを指摘する）。高校では“倫理”は必修科目ではなく、多くの大学生は大学に入学して初めて正規の科目として“心理学”を学ぶことになる。仮に“倫理”を選択履修したとしても、誤った知識が形成されてしまう危険が否定できない。米国ではすでに80年以上前に、高校生が少なからぬ心理学についての誤信念を持っていることが指摘され

ている（Garrett & Fisher, 1926）。

Lilienfeld et al. (2010) はそうした誤った心理学的信念・知識を“心理学的神話（psychological myths）”と呼び、それらが形成される原因として、(1)家族や友人、知人との言語的コミュニケーション、(2)選択的知覚・記憶、(3)マスメディアによる誤情報などを挙げている。こうした事情は日本でも同じで、特にマスメディアの影響は大きいと言える。例えば八田・八田・戸田山・唐沢（2011）は、テレビ番組では“科学的トリビア情報を無批判に芸能人を相手に‘脳科学研究者’達を介して提供することがブーム”（p.41）となっているため、そこで提供された神経科学についての“神話的情報”（p.41）（左脳タイプと右脳タイプなど）が無批判に信用されてしまう、と指摘する。

こうしたことを考慮すると、大学で“心理学”の講義をする上では、学生がどの程度正しい知識を持ち、どのような内容の誤った知識を有しているかを把握しておくことは重要であろう。われわれはこれまで大学新入生の誤信念について検討してきたが、本研究では高校生の抱く心理学についての誤信念について特に考察を加えたい。

今回の高等学校2年生と北陸学院大学新入生との比較では、平均正答率は前者が41.7%、後者が49.4%であったことから、誤信念は学年が上がるとともにわずかながら減少する可能性が考えられる。野瀬・山下・木島（2011）は大学生の学年間比較をし、学年が進むにつれ正答率が上がることを示し、心理学以外の科目の履修経験が誤った心理学知識の修正に役立つ可能性を示唆している。高校2年生と大学新入生の正答率の違いも、諸科目の履修経験の差が関与していることが考えられる。

2. 誤って抱かれている心理学知識

心理学領域別にみた正答率50%以下の項目数は、表3に示したとおりである。心理学全般5項目のうち、高校生で正答率が50%以下である4項目(項目1、2、3、10)はいずれも心理学の定義に関する短文からなる項目であり、高校生は心理学について基本的に誤ったイメージを有していることが示唆された。大学新生でも3項目(項目1、3、10)は正答率50%を下回っていた。

個々の領域についてみると、高校生・大学新生ともに、臨床心理、社会心理で正答率50%以下の項目が多かった。脳のテーマとともに、臨床心理のテーマはマスコミでもしばしば取り上げられ、これに関心を持つ人も少なくない。しかしながら、臨床心理についての正確な知識は残念ながら十分には普及しておらず、むしろ誤った信念を抱いている者が多いことが示唆された。例えば、項目31“臨床心理学者として開業するためには、日本では厚生労働省の実施する国家試験に合格しなければならない”は、資格という基本的レベルの知識を扱った項目であるが、その正答率は高校生が8.7%、大学新生が12.5%とかなり低い(現段階では、臨床心理士は国家資格ではない)。しかも大学新生では、この臨床心理士資格について強い確信を持って誤答していた。項目26“訓練された精神科医や心理学者は、正常な人間が精神病を装っても数回の面接を行えばそれを簡単に見破ってしまう”での低い正答率(13.0%と26.1%)も、臨床心理のテーマについてのマスメディアの不正確な情報がその一因であることが考えられる。

クイズ解答と確信の有無の関係をみると、高校生・大学生ともに、項目33“子どもは大人よりずっと容易に暗記することができる”という誤った心理学知識について“正しい”と確信を持つ者が多かった。

次に高校生が持つ心理学知識で正しいものについてみると、項目32、8、17、14は70%以上の確率で正しく棄却された。“心理学を学ぶと他人の心が容易に分かるようになる”“子どもは善悪の感覚を持って生まれてくる”という内容や表現については懐疑的な視点を持ちやすかったと思われる。

3. 今後の課題

本研究で用いた丹治他(2003)のクイズは、受講生に心理学の授業に対する興味を抱かせ、授業への参加の動機づけを高める目的で作成されたものである。そのため、そこで使用している項目の中には、その表現に厳密さを欠くものや、厳密にみれば論争中のテーマも含まれること、クイズを構成する項目はすべての心理学の領域をカバーしておらず、また項目の数は各領域で必ずしも同数とはなっていないことは先に述べたとおりである。こうした問題は、心理学の誤った知識についての他のテスト(Vaughan(1977)のTest of Common Beliefs(TCB)など)にも認められるものである。これらの問題を踏まえ、最近、われわれは各領域ほぼ同数ずつで、正解についても○と×の両方を含む85問のクイズを作成した(木島・野瀬・山下, 2013)。今後は項目をさらに吟味したうえで検討を深める必要があろう。

また、もう一つの課題は、どのように誤信念を修正するかである(福田, 1988; 八田他, 2011)。Kowalski & Taylor(2009)は、学生は心理学の講義を履修する前に多くの心理学についての誤信念を持っているだけでなく、講義終了後もほとんど誤信念を修正しない、ということをも多くの研究が示している、という。神経科学の誤信念について検討した八田他(2011)もまた、講義1回目と最終回で比べると、全体的な修正率は5.4%であったと報告している。そしてこの修正率は成績の良い学生の貢献によるものであって、“知的レベルの低い学生は…修正情報が提供されても一旦獲得された情報の修正に至らないと考えることができる”(p.45)とも述べている。講義担当教員は、成績の良い学生だけを相手にするわけではないので、聴講学生にどうアプローチすれば誤信念の修正につながるか、さらに検討する必要があろう。

謝辞 本研究は2012年度・2013年度北陸学院大学及び北陸学院短期大学部共同研究費より助成を受けました。ここに記して謝意を表します。

また、本研究の実施に当たり、文教大学の故丹治哲雄教授からの貴重なご意見を参考とさせていただきましてことに深謝申し上げます。

<引用文献>

- 1) 福田幸男(1987). 一般教育の心理学受講生の misconceptions 横浜国立大学教育学部教育実践指導センター紀要, 3, 25-34.
- 2) 福田幸男(1988). 一般教育の心理学受講生の misconceptions (2) 横浜国立大学教育学部教育実践指導センター紀要, 4, 9-23.
- 3) Garrett, H. E. & Fisher, T. R. (1926). The prevalence of certain popular misconceptions. *Journal of Applied Psychology*, 10, 4, 411-420.
- 4) 八田武志・八田武俊・戸田山和久・唐沢 穰(2011). 神経科学の誤信念の修正は講義を通じて可能か? 人間環境学研究, 9, 1, 41-46.
- 5) Holley, J., & Buxton, C. (1950). A factorial study of beliefs. *Educational and Psychological Measurement*, 10, 400-410.
- 6) 稲葉智子(1991). 大学生の心理学知識に関する調査研究 1990年度文教大学人間科学部卒業論文(未公刊).
- 7) Kelley, H. H. (1992). Common-sense psychology and scientific psychology. *Annual Review of Psychology*, 43, 1-23.
- 8) 木島恒一・野瀬 出・山下雅子(2008). 大学新入生の「心理学」知識—自分の「心理学」知識に対する確信度と知識の正誤— 日本心理学会第72回大会発表論文集, 1312.
- 9) Kijima, T., Nose, I., & Yamashita, M. (2012). Misconceptions about modern psychology among Japanese first-year students. *Japanese Journal of Applied Psychology*, 38 (special edition), 1-7.
- 10) 木島恒一・野瀬 出・山下雅子(編)(2013). 誤解から学ぶ心理学 東京: 勁草書房
- 11) Kowalski, P., & Taylor, A. K. (2009). The effect of refuting misconceptions in the introductory psychology class. *Teaching of Psychology*, 36, 3, 153-159.
- 12) Lilienfeld, S. O., Lynn, S. J., Ruscio, J., & Beyerstein, B. L. (2010). *50 Great Myths of Popular Psychology: Shattering Widespread Misconceptions about Human Behavior*. Chichester: Wiley-Brackwell.
- 13) McCutcheon, L. E. (1991). A new test of misconceptions about psychology. *Psychological Reports*, 68, 2, 647-653.
- 14) McKeachie, W. J. (1960). Changes in scores on the Northwestern Misconceptions Test in six elementary psychological courses. *Journal of Educational Psychology*, 51, 240-244.
- 15) Nixon, H. K. (1925). Popular answers to some psychological questions. *American Journal of Psychology*, 36, 3, 418-423.
- 16) 野瀬 出・木島恒一・山下雅子(2009). 大学新入生の持つ心理学知識—正答率および確信率の学部間比較— 日本心理学会第73回大会発表論文集, 1280.
- 17) 野瀬 出・山下雅子・木島恒一(2011). 大学生の持つ誤った心理学知識—正答率の学年間比較— 日本心理学会第75回大会発表論文集, 1124.
- 18) 丹治哲雄・木島恒一・山下雅子・飯澤未来(2003). 大学新入生の心理学知識 I—人間科学部人間科学科新入生の場合— 教育研究所紀要(文教大学付属教育研究所), 12, 85-92.
- 19) 丹治哲雄・木島恒一・山下雅子・野瀬 出・岡部康成・市原 信(2006). 大学新入生の心理学知識Ⅲ—人間科学部新入生と法学部・経済学部新入生との比較— 教育研究所紀要(文教大学付属教育研究所), 15, 101-110.
- 20) 丹治哲雄・山下雅子・木島恒一・飯澤未来(2005). 大学新入生の心理学知識Ⅱ—人間科学部人間科学科新入生と理工学部新入生との比較— 教育研究所紀要(文教大学付属教育研究所), 14, 95-103.
- 21) 高橋美保・仁平義明(2010). 心理学は高校「倫理」の中でどのように扱われているか 日本心理学会第74回大会発表論文集1169.
- 22) Taylor, A. K., & Kowalski, P. (2004). Naïve psychological science: The prevalence, strength, and sources of misconceptions. *Psychological Record*, 54, 1, 15-26.
- 23) Vaughan, E. D. (1977). Misconceptions about psychology among introductory psychology students. *Teaching of Psychology*, 4, 138-141.
- 24) 山下雅子・木島恒一・野瀬 出(2010). 大学新入生の心理学知識—正答率の経年変化— 日本心理学会第74回大会発表論文集, 1172.